馬耳東風

うつ病の有病率はWHOの2001年の報告書によると全世界で約2％であるという．これは治療を必要とする患者数だというから，さらに多くの人がうつ病と無縁ではないことになる．事情はわが国でも同様で，2002年に実施された1,600人の一般人を対象とした面接調査によると，有病率はやはり約2％であり，生涯有病率（一生の間にうつ病になる割合）は6.5％にもなったということである．6.5％といえば約1/15であるから，知り合いが15人いれば，1人は一生の間にうつ病にかかる計算になる．そういえば小生の周囲にも医者の治療を受けたうつ病経験者が数名いるが，知り合いの総数から計算すると平均より多いような気がする．それはさておき，多くは壮年期の人間で，原因は他人の小生が伺うよしもないが，おそらくは仕事上の悩みが原因であろう．一人だけ老年期の知人がいたがこの人の場合は退職がきっかけであったから，仕事をリタイアした喪失感とか脱力感が引き金になったのかも知れない．その彼に過日2年ぶりに会ったらすっかり回復していた．聞けば発病後に飼い始めた犬のおかげだという．昨今人気のトイプードルだそうで，その可愛さについて延々と聞かされた．小生も子供の頃からの犬好きで今も飼っており，犬好きに関しては人後に落ちないつもりであったが，その小生が少々辟易するくらいであった．子育てが終わり，仕事もリタイアした無趣味の人間が，生きる張り合いをなくして急速に老け込むという話は昔からよく聞く話である．中には知人のようにうつ病になる人がいても不思議ではない．そんな折り，頼りにされ，甘えてくれる存在，時には連れ合いや独立した子供以上に可愛がってやりたいと思う動物が現れたことにより，癒され，再び生き甲斐を感じることによりうつ病も次第に回復したのであろう．伴侶動物（コンパニオンアニマル）によるアニマルセラピーの典型と言えるかも知れない．

ところで伴侶動物という呼称は，1985年頃から日本獣医師会が主導して使われ始めたと記憶しているが，それから10年，それまでペットと呼ばれていた犬や猫が人間のかけがえのない伴侶や友達，あるいは仲間になっていると実感したのは，阪神淡路大震災（1995）の時であった．被災者の中には避難所に犬や猫を連れて行った人たちもいたが，多くは周囲への気兼ねから早々に避難所を退去して，連れて行った動物と一緒に危険が残る自宅に帰っているとのニュースに接した時，そのことを強く感じたのである．一方，阪神淡路大震災よりも遙かに被害が甚大であった東日本大震災と原発事故では，動物を置き去りにせざるを得ない場合が多かったようである．自分の伴侶として，友達として，あるいは自分の分身として，共に生活してきた動物を置き去りにせざるを得なかった人たちの気持ちを考えると胸が痛む．避難所に向かう車を追いかける犬の映像は涙なしには見ることが出来なかった．今回のようなせっぱ詰まった事情により，伴侶動物が飼育不可能となった場合，欧米人なら十中八九は安楽死させるのであろうが，われわれ日本人には強い抵抗感がある．置き去りにされた犬や猫の保護に多くのボランティアが活動してくれていることは心強い．しかしボランティアに頼らなくてもいいような状況，すなわち人間が避難するときは伴侶動物も一緒と誰しもが考え，避難所には伴侶動物のスペースも用意されているという社会が一日も早く来ることを強く願っている．（久）